*Japan Association of Synthetic Anthropology*

# 総合人間学会

Newsletter　第 47 号　　2023 年 9 月 25 日発行

発行人：古沢広祐
事務局：〒112-86060 文京区白山 5-28-20 東洋大学社会学部社会学科 松崎良美研究室
電　話：03-3945-7847（直通）／ファックス：03-3945-7626
E-mail：contact@synthetic-anthropology.org

【 目 次 】

Ⅰ．巻頭言……p. 1

Ⅱ．第 17 回大会シンポジウム報告・WS 実施者報告……p. 2

Ⅲ．2022 年度 総会報告……p. 3

Ⅳ．理事会・運営委員会報告……p. 8

Ⅴ．役員、決算・予算資料など……p. 11

Ⅵ．事務局からのお知らせ……p. 13

## Ⅰ．巻頭言

### 今後の学会への期待　（2023 年 6 月研究大会・総会、会長挨拶）

学会の設立以来（2006 年）、時代動向は 180 度と言ってよいような大きな曲がり角を迎えているかに見えます。世界規模では、世界金融危機（2008 年リーマンショック）、東日本大震災と原発災害（2011 年）、コロナ危機（2020 年）、ウクライナ危機（2022 年）、どれも想定外の事態が続いてきました。日本国内でも、少子高齢化で人口ピーク（2010 年前後）と地域衰退（消滅自治体）が懸念され、21 世紀末には人口半減社会が予想されています。若い世代においても、不登校、いじめ、引きこもり、自死問題などは高止まり状態が続いています。

一方、人類の大繁栄による「人新世の時代」や「人知を超える AI 時代」が語られだす中で、「人間とはどういう存在か？」という学会が取り組むべき課題は増大するばかりです。取り組むべき課題は山積して目白押し状態であり、学会に対する期待は高まっています。

学会は、創設世代の世代交代もあって、組織や体制の強化・再編が求められております。次年度は、第 9 期から第 10 期に入りますので、とくに若い世代や新しい学会員による積極的な関与を期待しております。

総合人間学会、第 9 期会長　古沢広祐

# Ⅱ．第17回大会シンポジウム報告・WS実施者報告

## 1.　大会シンポジウムをふり返って（企画コーディネーター報告）

「近代的「知」のあり方を問い直す――授けられる「科学」／「学習」時代に、「学び」はどう対峙する？」というテーマの下、大会シンポジウムが開催された。シンポジウムは、野家啓一さんによる特別講演と、松本亜紀さん、岡健吾さん、朝倉景樹さんらパネリスト３名とコメンテーターに野家啓一さんとアドラー・楊さんを迎えたパネルディスカッションの二部で構成され、４時間半にわたる大変充実した議論を持つ時間となった。

議論は、そもそも人類が、「近代知」あるいは「近代科学」として築いてきた知の体系はどのようなものであったのか――その振り返りを皮切りに、「近代知」に対するunlearn：学びほぐしの必要性が、野家さんの特別講演によって提起され、展開していった。パネリストからは、「学校教育」の枠にとどまらない、さまざまな“知”の現場からの「学び」の実践やその意義、課題が共有された。松本さんからは、妊娠・出産の過程で大切にされてきた教えや文化、岡さんからは、無邪気に捉えきれない側面を持つアイヌの文化や歴史に関する言及があり、朝倉さんからは、不登校の子どもたちが改めて、みずからの人生の展望を持っていく中で、必要な知識や学びを整理し、“自分のため”の知を獲得していく実践例が紹介された。「近代知」「近代科学」の限界が指摘され、ポスト・トゥルースの時代の中で、どのように様々な「知」を捉えなおしていくことができるのだろうか。私たちが学ぶべき知が、もはや特定のカリキュラムで構成し得ないとき、そのオルタナティブはどのように思い描くことができるのだろうか。そういった指摘もシンポジウムの中で見られていたように思う。

シンポジウムの議論の中では、リチャード・ローティによるfruitful disagreement（実りある不一致）も野家さんより言及されていた。さまざまな主体によって、それぞれにとっての「真実」が叫ばれ、分断が進む今日の世界においても、それぞれが主張する「真実」に対して――完全に共感することがたとえできなくても――その主張や結論に至る思考過程やプロセスが共有可能であることに可能性があるように個人的には感じた。一致を目指していくのではなく、不一致を許容していく――“ミニマムな合理性”を目指すその過程や態度にこそ、unlearnの本質的意味や「知」の飛躍的拡大の可能性があるのかもしれない。また、「近代知」的な発想を大前提とするのではなく、みずからにとっての「真実」を共有可能な形で表現・再提示していくという意味において、必要となる”道具”としての「知」や「学ぶべき対象」はありえるのかもしれない。

他者とかかわりあいながら、みずからの生に誠実に生きていくことを支える「学び」のありようが、シンポジウムを通じて、おぼろげながら描かれたようにも感じる。ひとりひとりが生きる主体として、必要な「知」や「学び」を自覚し、その獲得に努めていくことができるような場を構成していく具体的な試みは、今後もさまざまな場で継続して行い、ぜひ引き続きの議論としていきたい。シンポジウム開催にあたりご尽力くださった皆様、ご登壇くださった皆様に、この場を借りて御礼申し上げます。

松崎良美

## 2.　ワークショップ（ WS）実施者報告

（WS　A）

「コミュニティとの連携から考える学びのあり方の再考――まなキキ・フォスタープランの実践を通じて」というタイトルでWS報告を行った。学びの危機プロジェクト、通称まなキキは、障害や事情があって学びづらさを抱えている子どもたちの学びの支援に取り組むプロジェクトとして、2020年新型コロナ感染拡大を機に結成された。感染症予防目的とはいえ、真っ先に学ぶ場としての学校が閉じられたことで、子ど

もたちの「学び」に対する信頼や意義が圧倒的に損なわれたのではないか…、社会の側もまた、未曾有の社会的危機に対峙して“思考”しつづける努力を尽くすことはできていただろうか…――私たちがこの世界を生き抜いていくための「学び」とはどのようなもので、どのような価値を見出すことができるのか、その課題を地域コミュニティとともに連帯し、対峙していく様々な取り組み事例（博物館などミュージアムとの協働、オンライン社会科見学、オンライン家庭学習支援の実践とその取り組みを受けての教材開発）を共有し、その可能性について議論した。

松崎良美

（WS　B：若手ワークショップ）

本年度の若手ワークショップでは、井上浩朗・横山智樹・高橋知花の報告に基づいて、「持続可能性を問い直す」という企画を実施した。井上会員は環境倫理学、横山会員と高橋会員は社会学の専門家であり、学問の領域・方法の異なる若手が、複数回の準備会を重ねつつ、環境に関わる現代社会の危機を検討した。各報告者が、＜地域社会の持続可能性＞を問う意義を共有した点は、本企画の特徴であったといえる。

井上会員は、持続可能性の捉え方として、「上限の持続可能性」と「下限の持続可能性」という視点を提示し、地域社会の過疎によって生じる危機を重視したうえで、内発的発展論を再評価している。横山会員は、原発事故による福島県南相馬市の住民の被害と復興政策の問題点について、詳細な事例研究を提示し、高橋会員は、秋田県能代の一集落における森林資源の過少利用とその共同管理の再構築について検討した。

本多俊貴

（WS　C：国際ワークショップ）

「学校体系に再生産される世界的問題とそれから脱却する可能性――オルタナティブ（代案・実験）教育からの試み――」をテーマとした本ワークショップでは、多様な視点から現代の教育問題を掘り下げた。知識循環協同組合代案大学の Park, Du-Heon 氏は、70％を超える高い大学進学率とそれに伴う社会的問題に焦点を当て、非主流的な生活の正当化や象徴資本の重要性を強調した。李靜湖氏は、釜山全学び場を例に、市場経済への依存軽減や共に生きる村共同体の創出といった青年の問題を解決する鍵としてのオルタナティブ教育を提案した。王美玲氏は、台湾と日本のオルタナティブ教育の取り組みを比較し、台湾は実験教育制度を通じてオルタナティブ教育の制度化を進めているのに対し、日本はフリースクールを民間団体として位置付けるなど、異なるアプローチを取っていることを明らかにした。これらの報告を通じ、教育の再考や新しい学びの形の必要性が示唆された。

楊 逸帆（ｱﾄﾞﾗｰ・ﾖｳ）

## Ⅲ．2022 年度 総会報告

日時　　2023 年 6 月 17 日　12 時～12 時 45 分　　場所　Zoom

始めに木村武史会員が議長に選任された。続いて古沢広祐会長から挨拶があった（冒頭、巻頭言参照）。

### 各種報告・審議事項など

1. 事務局、活動報告（鈴木事務局長）

本学会の状況について、会員数（188 名、うち一般会員 149 名、会費減額会員 31 名、会費免除会員 8 名）

および2022年4月1日から2023年6月1日までの入退会者数（入会8名、退会14名、ただし逝去会員含む）について報告があった。

またこれまでの理事会・運営委員会の活動日程の報告と、次年度の活動計画についての説明があり、後者について承認された（詳細はNL末尾を参照）。

2. 「学会運営・会則等検討委員会」の報告（黒須三恵委員長）

Ⅰ. 2022年度活動について報告があった。

1. 委員会構成
   委員長：黒須副会長、委員：古沢会長、鈴木事務局長、助言者：長谷場副会長、鬼頭理事
2. 学会運営等の現状認識と課題について、アンケート調査を理事対象に2022年11月から12月にかけて実施した。その結果、4名から回答があった。その回答内容に関して理事に意見を求め、６名の委員長より返答を得た。
3. 経緯をふまえ、学会活動の活性化等のために会員登録の現状を確認した。その結果、性別欄、登録内容更新の会員への働きかけ、個人情報保護に関する規定についての課題が見出された。

Ⅱ. 2023年度の活動計画について説明があり、承認された。

1. 会員に関する個人情報保護規定の検討。
2. 会則に関する検討（現状と齟齬のある部分、任期・役員数をふくむ役員選考について）。
3. 役員選挙制度の検討（役員任期、役員数（選挙選出・推薦選出、女性・分野）、投票記名数、選挙管理委員会等。

3　「ハラスメント防止規約準備委員会」の報告　（本多俊貴委員長代行）

Ⅰ. 2022年度の活動について報告があった。

1. 準備委員会構成員
   河上睦子（委員長）、本多俊貴（委員長代行）、大橋恵美子、鬼頭孝佳、小林加代子、鈴木信国、長谷場健（アドバイザー）
   ※第一回委員会において河上委員長の体調不良をうけ、本多俊貴が副委員長に任命され、委員長業務を代行することとなった。
2. 委員会開催
   10月より準備が開始され、12月20日に第一回委員会が発足し、本学会におけるハラスメント委員会立ち上げの経緯と、基本的な目的が共有された。その後、委員会は2023年2月21日、2023年3月29日に開催された。
3. ハラスメント規約作成に向けた作業内容の確認（宣言・ガイドライン・規約・防止委員会設置）、およびその順序について検討した。鬼頭委員が「宣言」の草案を作成し、それをもとに各委員が検討を進めている。なお、本委員会では、当初、総会までに宣言案を作成する予定であったが、委員長代行の本多の体調不良を理由として、作業に遅れが生じたため、今後のスケジュールの立て直しが必要である。

Ⅱ. 2023年度の活動計画について説明があり、承認された。

1. 総合人間学会「ハラスメント防止宣言（仮）」の草案を作成し、理事会・運営委員会で検討いただく。なお、ハラスメント防止のあり方は、より広い学会員に有用なものでなければならないため、日本の人文・社会科学系の他学会や国連などの資料を収集するほか、個々の会員から意見を集める方法も検討する。
2. 2023年度中の「宣言」の作成を目標とし、順次、ガイドライン・規約の作成へと進めていく。

4. 「編集委員会」の報告（河上睦子委員長、河野貴美子副委員長）

Ⅰ. 2022年度の活動について報告があった。

1. 委員会構成員（HP参照：http://synthetic-anthropology.org/?page_id=3180）

2. 委員会開催
第1回:2022/7/10、第2回:2022/10/16、第3回:2022/12/18、第4回:2023/2/19、第5回:2023/4/9、第6回：2023/5/7
3. オンラインジャーナル版『総合人間学』第17巻の掲載論文等の査読・編集・発行作業を行い、2023年6月2日に公開した。内容は以下の通り。〈投稿論文〉2、〈研究ノート〉3、〈若手シンポジウム報告〉3、書籍紹介等。なお投稿論文のエントリー数は9稿あったが、コロナ下のなかで投稿数が少なくなったのは残念である。
4. 2022年度投稿規定の一部改訂を行った。また投稿論文の査読・判定についての「内規」（非公開）の修正をおこなった。
5. オンラインジャーナル版『総合人間学』17巻に掲載された投稿論文につき、J-Stageに掲載する準備を行った。

Ⅱ．2023年度の活動計画について説明があり、承認された。
1. 来季は、佐貫浩新編集委員長のもとで、編集委員会の刷新を図る。
2. 「総合人間学会第17回研究大会」2023年 6月17.18日（オンライン開催）を踏まえ、『総合人間学』第18巻を編集委員会のもとで刊行する。
3. 『総合人間学』のオンラインジャーナル版と書籍版との関係等について、合評会を含めて、運営委員会で検討する。
4. 『総合人間学会』前会長（小林直樹・小原秀雄）のご逝去に伴う特別企画を検討する。
5. 『総合人間学』17巻に掲載された投稿論文のJ-Stage掲載作業を実施する。
6. J-Stage登録に際して必要となる項目を追加すべく、投稿規定を改訂する。

5. 「出版企画委員会」の報告（中村俊委員長）

Ⅰ．2022年度の活動について報告があった。
1. 委員会構成員（HP掲載）
2. 総合人間学雑誌17号『ポストヒューマン時代が問う人間存在の揺らぎ』を刊行。
本の泉社と出版契約し、経費50万円（税抜）、600部（うち300部を学会に無料献本）、販価1600円で落着した。会員への発送業務は学会事務局が実施（2023年6月10日）。
3. 出版物を広めるための活動。
出版契約に基づくインターネット販売、国会図書館などへの送付に加え、本学会員による紹介、購入依頼促進のために、運営委員・理事には2冊、今年度の新規会員にも2冊、著者には数冊を進呈した。会員は本の泉社に注文すれば1200円で複数冊購入できる。

Ⅱ．2023年度の活動計画について説明があり、後日理事会で審議することとなった。
1. 出版企画のあり方を見直すために、出版企画委員を拡充・刷新して1年かけて議論する。
2. 特に、大会シンポジウムの発表と出版企画を切り離し、本学会の日頃の研究活動（電子ジャーナル、研究談話会など）と連携し、その活性化、刷新に結びついた企画を検討する。
3. 学会経費がひっ迫していることも考慮し、出版を休止することも検討する。

6. 「研究・談話委員会」の報告（木村武史委員長）

Ⅰ．2022年度の活動について報告があった。
1. 委員会構成員（HP掲載）
2. 2023年4月22日、オンライン
河上睦子著『「人間とは食べるところのものである」―「食の哲学」構想―』合評会を開催。
コメンテーターは、亀山純生氏、片山善博氏。
3. 2022年12月4日、京都市左京区役所総合庁舎会議室1B
第21回総合人間学会関西談話会
発表1：宗川吉汪「日本はなぜ新型コロナに敗れたか」

発表2：西郷甲矢人「〈数理人文学〉の確立に向けて」
司会：木下康光

Ⅱ．2023年度の活動計画について説明があり、承認された。

1. 2023年7月16日、京都市左京区役所総合庁舎会議室1B
第22回総合人間学会関西談話会
発表1： 上柿崇英「〈自己完結社会〉論と「現代人間学」の方法論」
発表2： 河野勝彦「ロイ・バスカーの批判的実在論：自然科学と社会科学の違い」
2. 2023年7月23日
大上泰弘氏（非会員　帝人株式会社）による話題提供　タイトル等は追って公開予定。
3. 2023年秋　確定次第、話題提供者・タイトル・日程を公開予定。

7. 「KW集発刊委員会」の報告（穴見副委員長）

Ⅰ．2022年度の活動について報告があった。

1. 委員会構成員（HP掲載）
2. 学会創設20周年記念「総合人間学キーワード（KW）集」作成プロジェクトの一環として、2022年2月に総合人間学KW原稿の募集を広く会員に行ったところ、これまでに6組8名からの応募があった。公募では1KWにつき1-少数名による執筆を原則とし、複数者による共同執筆方式も可としたが、応募原稿はいずれも1KWにつき1-2名による執筆であった。今年度はその中で「共同性」「コミュニティ」「政治人」「人間の尊厳」「スピリチュアルティ」「生命」「人間生物世界」「自然保護」の8KW（4組5名）について審査を行った。
応募原稿は月一回の委員会で審査され、複数回の委員会・執筆者間の応答を経て、現在では最終的な審査段階にある。審査は、必ずしも専門的な立場からの査読ではなく、執筆内容、形式、分かりにくさなどに関して行い、最終的には執筆者の判断に委ねる方針をとった。
3. 2021年9月にKW委員2名を含む計5名により提出された複数者共同執筆方式による「総合人間学KW〈対話〉共同執筆企画」の原稿がまとまり、2022年8月に学会HPに掲載した。なお、この記述方式では一つのKW原稿をまとめるのに1年近くの時間を要し、先にHPに掲載した「総合人間学KW集・記述モデル」と同様に2026年の20周年記念までに取り扱えるKW項目は数個に限定される。従って、これらの記述方式の原稿を「総合人間学キーワード集」のなかでどのように位置づけるかは今後の課題である。
3. 対象8KWの審査が3-4稿と進んだ段階で、総合人間学KW記述の在り方の理解を深めるために、執筆者を交えて「公募KW」企画に関する公開意見交換会を今年（2023年）4月1日に開催した。
4. 活動を通して総合人間学KWの記述法はどうあるべきかが繰り返し議論され、今後、執筆者に「総合人間学KW」執筆にあたり求められる要点をより分かりやすく提示することの重要性が確認された。

確認された要点は「論文とは異なるKW記述とは」、「イントロに概説（一般論）を」、「自説または造語KWは一般論・一般語との関係づけを」、「専門を超えて（出て）一般読者むけに分かりやすく」、「総合人間学のKWとして取り上げる理由」、「歴史的背景と反論を含む多角的視点」、「総合人間学のテーマおよび展望」などである。

Ⅱ．2023年度の活動計画について説明があり、承認された。

1. 専門を超えた市民的目線で総合的な記述内容を期待するKW委員会と様々な専門の執筆者との応答は困難を伴うものであったが、その実践には実りが少しずつ実感されている。審査終了の原稿は「公募総合人間学KW集」としてHPの総合人間学KW集欄にUPする。
2. 2023年度からは、公募は継続しつつ、KW委員会がKWを選出し、関係者に執筆を依頼する予定。そして、「総合人間学KW集・記述モデル」、「総合人間学KW〈対話〉共同執筆企画」、「公募総合人間学KW集」、「KW委員会選出KW集」が出そろった段階で、一般的なKW集の編集に留まらずKW用語集なども含めた「総合人間学キーワード」の総合的編纂を検討する。

8. 「広報委員会」の報告（太田明委員長）

Ⅰ．2022 年度の活動について報告があった。

1. 委員会構成員（HP 掲載）
2. 例年通り、学会ウエッブサイトの運営を主に活動した。

HP の可読性向上の課題を認識し、蔭木理事（事務局協力理事）の助力のもとに 2022 年 8 月からメニューの変更等、改善に取り組んできた。また、11 月には楊理事から個別に、学会ウエッブサイトをストーリーラインを重視したランディングページ形式とする具体的な HP 改善提案があった。

Ⅱ．2023 年度活動計画について説明があり、承認された。

1. 2022 年度提案された案をもとにして、学会ウエッブサイトの改善を実行する予定である。具体的には以下のような点を考えている。

（ア）メニューの階層の整理

（イ）各ページの変更・新設

1）ホーム：冒頭に学会の簡単な紹介文を置き、続けて現在の「直近のイベント／学会誌販売リンク」記事の内容を置き、情報のスリム化を図る。

2）お知らせ：現在の「ホーム」の「直近のイベント／学会誌販売リンク」以外の最新情報を一覧する。

3）学会案内 About this Association、大会／研究・談話会、出版／発行物ツリーを下層のページへのナビゲーションページとする。

4）次回大会、過去の大会：現在の「大会」ページを二つに分割する。

5）その他に、右サイドバーの更新、欧文フォントの変更や、長期的な検討方針として、学会全体の魅力を提示していくサイト構築（非会員・初訪問者向けのページ追加・海外向けのページの追加（多言語化など）がある。

9. 「若手委員会」の報告（本多俊貴委員長）

Ⅰ．2022 年度の活動について報告があった。

1. 委員会構成員（HP 掲載）

※ 本学会若手会員のうち、2022・2023 年度若手ワークショップ参加者（木野村樹里、菅原想、井上浩朗、横山智樹、高橋知花）が実質的な構成員ともいえる。なお、「副委員長」は、理事会の承認する正式なものではなく、若手委員会の自主的な運営として、独自に大倉茂氏にお願いしている。

2. 若手ワークショップ準備会の開催。

【2022 年度大会】2022 年 5 月、2022 年 6 月

【2023 年度大会】2022 年 12 月、2023 年 1 月、2023 年 2 月

3. 『オンラインジャーナル総合人間学』掲載予定論文の検討会。

【2023 年度発行】2022 年 11 月、2023 年 2 月

4. 2022 年 6 月の大会において、若手ワークショップを実施した。登壇者は、木野村樹里・菅原想であり、現代社会にあらためて問われるようになった「愛」をテーマとする報告に取り組んだ。ワークショップ実施にあたり、準備会を計５回（2022 年度は２回）行った。
5. オンラインジャーナル版『総合人間学』第 17 巻に木野村樹里・菅原想の論文と、本多俊貴の趣意文を掲載させていただいた。テーマは、「不安の時代の『愛』を考える」とした。責任者の本多が、体調不良などの理由から、趣意文の作成・提出に支障をきたし、編集委員会に多大なご迷惑をおかけしたことは、今後の委員会のあり方としても、課題としたい。
6. 2023 年度若手ワークショップの人選と準備会を行った。メンバーは、井上浩朗・横山智樹・高橋知花・本多俊貴であり、テーマは「持続可能性を問い直す」とした。なお、本多の都合により

趣意文などの提出が停滞した点は、課題として残る。

Ⅱ．2023 年度活動計画について説明があり、承認された。

1. 若手ワークショップを継続する。2023 年度大会で実施したのち、12 月頃より、新たな人選にもとづいて、2024 年度大会の準備に取り組む。
2. ワークショップ報告者の成果を『オンラインジャーナル総合人間学』に掲載し、本学会の若手の研究発展を促進する。2024 年度のオンラインジャーナル掲載に向けた論文執筆に取り組む。

10. 役員人事（審議事項）

以下の人事について説明があり、承認された。

1. 編集委員長交代
   河上睦子　→　佐貫浩
2. 運営委員辞任
   穴見愼一　理事・運営委員　→　理事

11．2021 年度決算（審議事項）

別紙資料のとおり承認された。

12. 2002 年度予算（審議事項）

詳細を議論のうえ承認された。

# Ⅳ．理事会・運営委員会報告

## 2022 年度、臨時運営委員会・理事会

日時　　2023 年 6 月 2 日　10 時 30 分～12 時　　場所　Zoom

出席　　17 名（役員表順・敬称略）

古沢広祐　鈴木伸国　長谷場健　太田 明　柳沢遊　河上睦子　熊坂元大　木村武史　鬼頭孝佳　河野貴美子　久保田貢　黒須三恵　佐貫浩　本多俊貴　田中昌弥　上柿崇英　松崎良美

### 主な議題

Ⅰ．大会準備の確認

1. 大会のオンライン開催の準備状況確認
   蔭木理事からウェブサイトの大会報告案内が更新済みであること、申し込みも受け付けを開始しているむねの説明があった。　　6 月初めに予稿集を発信・発送予定。
   Google フォーム申込時にはパス（大会プログラムに記載）入力が必要。
   手順としては、先に作成済みプログラムとパスワードを、学会員にメール配信するのを早くしてはどうか。
2. 総会議事運営の準備
   司会者、議事記録者など、事前に候補依頼は事務局で調節しておく。

Ⅱ．総会での資料・議事の準備など

総会の進行は、各委員会の活動報告と決算状況から適正な予算執行かを確認する。その後、活動計画と予算案の確認という順で進めてはどうか。

1. 決算・予算（事務局）

近年の学会の会計状況が支出過多なので、支出を抑える予算案を作成した

- 編集幹事報酬を半額にしていただくことができないか。
  - 理由の説明を本人に果たし、承認を得たうえで進める必要がある。過去の支出内容に揺らぎが生じており、業務内容確認の上で金額の半減案の妥当性を検討して適正金額を検討してはどうか。
- 学術費積立金・若手奨励賞副賞費の積立金について、次年度は様子見をする（積み立て金なので次年度予算には入れず、支出が生じる場合には今ある積立金からの支出扱いとする）
- この間オンライン大会開催なので参加費徴収しづらかったが、対面開催で参加費徴収する形に戻していく必要もあるかもしれない。
  - 来年度の大会開催を想定して実施する方向で、徴収方法などは検討することが望ましいのではないか。
- 出版を隔年出版にするという対応可能性などは、今後の検討会議にて検討する。
  - 出版の内容もシンポジウムの報告になってしまっている現状で、書籍版としての位置づけを再検討して決めていく必要もあるのではないか。
- 財政逼迫について、なぜ赤字の状況になっているのか、ということを説明する必要がある。（論点としては、収支のクリッピングポイント、新型コロナウイルスでのオンライン開催→会費納入の停滞、出版費用の高騰など）→対面での開催などでの埋め合わせを、今後に期待したい。
- 滞納者に対して、理事会名義でも未納者への督促をするとよいのではないか。（以前からの課題なので会長と事務局の方でも検討中）。

予算の立て方について

- 従来から全会員からの納入がある前提で予算を立てていたが、そのとおりの支出がある前提で予算執行してしまうと、現状のように赤字になってしまう。
- 従来からの予算の立て方の方針を急激に変えてしまうと、理由説明が十分必要になるため、慎重に検討していく必要があり、部分的な修正にて改めたい。修正案を審議し承認する。

2. 事務局および各委員会の年間活動報告と次年度計画
   総会用の資料作成の準備としては、各委員会委員長には 2022 年度総括（ふり返り）、2023 年度の計画について、短文を用意してもらえると、総会資料や次回 NL にも利用できる。
3. 学会の状況と今後について
   学会運営・会則等検討委員会、ハラスメント規約準備委員会などは、継続的な活動。
   学会設立に貢献した故名誉会長に関する特集企画委員会（仮称）を発足させる（会長・副会長にて準備、調整していく）。
   次年度以降の「学会書籍の今後について」検討する委員会ないし検討会合（名称等は未定）を予定したい。
   学会員の高齢化と会員数の停滞状況について、会員拡大と若手層への働きかけ、広報活動は、継続的な課題として次年度以降も時間をかけて検討したい。

（次年度の変更事項、役員任務の調整・変更、投稿規定など）

穴見理事→運営委員辞退、理事は任期まで継続
編集委員長の交代（河上委員長から佐貫委員長へ）
投稿規定の変更→変更案を出して頂き、運営委員会・理事会の了解で進める。（変更内容の共有などを引き続き実施）

※ 今後の予定、持ち越しの検討事項は、メール審議にて対応する。

各委員会の年間活動報告と次年度計画の提出締め切りは、6/10 までにお願いしたい。
7 月 23 日に研究談話委員会の研究会及び運営委員を予定したい。
→　従来通り、各委員会で企画されているものは各委員会で主導的に実施していく。関西の談話会も独自に開催・運営・告知して実施している。

## 2023 年度第 1 回理事会・運営委員会

日時　2023 年 7 月 23 日　13 時 15 分～15 時 45 分　　場所　上智大学 7 号館 4 階会議室（HyFrex）
出席　18 名（役員表順・敬称略）　現地参加 4 名、他はリモート参加
古沢広祐　黒須三恵　河上睦子　長谷場健　太田 明　小原由美子　河野貴美子
木村武史　鈴木伸国　中村 俊　本多俊貴　岩田好宏　蔭木達也　菊池理夫 熊坂元大
近藤弘美　佐貫 浩　楊 逸帆

### 報告事項

1. 大会/総会のふり返り
   ・ アンケート集計をもとに 6 月開催の大会企画・運営につき反省・検討された。
2. 各委員会からの報告
   ・ 編集委員会（佐貫新委員長）から、投稿規定の J-Stage 向け更新が遅れており、今回は昨年度のものを使用する旨の報告があった。
   ・ 研究談話委員会（木村委員長）から、次回委員会の準備状況について報告があった。
   ・ KW 委員会（長谷場委員長）から年度替わりで河上委員が辞任される旨の報告があった。
   ・ 広報委員会（蔭木委員）から 2 月の委員会などでの提案にしたがって、夏季中に HP を更新する旨の報告があった。
   ・ 規約検討委員会（黒須委員長）から作業報告があった。

### 提案・検討・審議事項

1. 書籍版の今後について（出版企画委員会）
   ー　出版企画の再検討のために次号を休刊とする中村委員長の提案があり、議論された。
   ー　電子ジャーナル、HP など多様な媒体を一体化した広報体制の提案が楊理事からあった。
   ー　長谷場理事からは Video での広報拡充の提案があった。
   ー　蔭木理事からは、財政的制約からの活動縮小ではなく、よい企画を練ることにこそ資源を投じるべきであるとの提案があった。
   ー　以上をふまえ、出版企画委員会を中心に時間をかけて議論するとともに、出版企画委員を 3 名ほど補充委ずることが了解された。
   ー　次年度については今年の大会シンポジウム企画を中心とした第 18 号を 2024 年 5 月に出版することで決着した。
2. 合評懇談会および故名誉会長関連の特集企画について
   ー　会長から上記企画を今後進めていく意志が表明された。
      ー「合評懇談会」再開についての企画案
         これまで学会誌刊行後、運営委員会や編集委員会と研究談話委員会の協力で合評会を行ってきた。学会誌の内容を会員や一般の方に共有して頂く重要な機会であった。
         この間、編集委員会と出版企画委員会の分離過程で合評懇談会が中断しており、再開について会長の仲介により準備したい。
      ー 故名誉会長関連の特集企画について（継続）
         「学会設立に貢献した故名誉会長に関する特集企画委員会」（仮称）について、会長、

副会長を中心に、編集委員会との相談の上で、故名誉会長と関係深い方々にお声かけしていきたい（前会長、前々会長、編集委員会の推薦、関係の深かった理事や会員などを想定）。

3. 次回大会企画についての議論が次回送りとなるので、昨年のように自由懇談会を呼びかけ、運営委員会に向けてアイデアや素案をつのりたい（会長）。
4. 次年度委員会日程、次年度研究大会・シンポ企画案など（時間切れ、次回送り）

# V．役員、決算・予算資料など

## 1. 現状の役員体制

学会 HP（http://synthetic-anthropology.org/?page_id=3180）をご覧ください。

## 2. 2022 年度決算資料

2022年度決算（報告）期間 2022年4月1日～2023年3月31日

| 収入の部 | 2022年度決算 | 予算 |
|---|---|---|
| 年会費 | 1,079,000 | 1,681,000 |
| 今年度・一般会員（満額会費対象者） | 716,000 | 1,078,000 |
| 今年度・一般会員（減額会費適用者） | 68,000 | 120,000 |
| 他年度年会費 | 295,000 | 483,000 |
| 寄付金・特別講演会収集金（大会除く） | 17,000 | 10,000 |
| 書籍売上 | 20,000 | 5,000 |
| 利息 | 3 | 5 |
| 繰越金 | 202,902 | 674 |
| 収入合計 | 1,318,905 | 1,696,679 |

| 支出の部 | | 予算 |
|---|---|---|
| 大会運営費 | 129,133 | 180,000 |
| 年会費等振込手数料・引出手数料 他 | 3,060 | 5,000 |
| 理事会・運営委員会活動費 | 0 | 3,000 |
| 会議代（湯茶代など） | 0 | 0 |
| その他（会場代・文具代など） | 0 | 3,000 |
| 研究・談話委員会活動費 | 0 | 28,000 |
| 研究会・談話会開催費（講師謝金など） | 0 | 20,000 |
| 郵送費（談話会案内はがきなど） | 0 | 3,000 |
| その他（会場代・文具代など） | 0 | 5,000 |
| 若手委員会活動費 | 0 | 5,000 |
| 交通費 | 0 | 5,000 |
| その他（会場代など） | 0 | 0 |
| 広報委員会活動費 | 0 | 0 |
| チラシ発注費 | 0 | 0 |
| その他 | 0 | 0 |
| 事務局活動費 | 219,636 | 245,000 |
| 事務用品・消耗品費 | 0 | 5,000 |
| 郵送費・配送代 | 39,636 | 12,000 |
| 印刷費（NL・大会予稿集など） | 0 | 10,000 |
| その他（封筒印刷・振替伝票印刷・コピー・FAX等） | 0 | 3,000 |
| 交通費 | 0 | 10,000 |
| 事務局幹事報酬 | 180,000 | 180,000 |
| 会員発送作業アルバイト代 | 0 | 20,000 |
| その他（会議室代など） | 0 | 5,000 |

| | | |
|---|---|---|
| 編集委員会活動費 | 158,251 | 231,000 |
| オンラインジャーナル維持管理費 | 7,731 | 8,000 |
| 郵送費・コピー代 | 10,520 | 3,000 |
| 編集幹事報酬 | 120,000 | 120,000 |
| J-STAGE登録・更新手続き等アルバイト代 | 20,000 | 100,000 |
| 学会誌支払（出版費用、送料） | 592,146 | 560,000 |
| ZOOM有料ライセンス | 21,376 | 24,000 |
| 会員管理システム維持費 | 144,452 | 150,000 |
| 若手奨励賞副賞費 | 30,000 | 30,000 |
| 学術誌積立金 | 50,000 | 50,000 |
| 予備費 | 0 | 185,679 |
| 支出合計 | 1,348,054 | 1,696,679 |

## 3. 2023 年度予算資料

2023年度予算（案） 期間 2023年4月1日～2024年3月31日

| 収入の部 | 2022年度決算 | 予算 |
|---|---|---|
| 年会費 | 1,079,000 | 1,630,000 |
| 今年度・一般会員（満額会費対象者） | 716,000 | 1,036,000 |
| 今年度・一般会員（減額会費適用者） | 68,000 | 124,000 |
| 他年度年会費 | 295,000 | 470,000 |
| 寄付金・特別講演会収集金（大会除く） | 17,000 | 10,000 |
| 書籍売上 | 20,000 | 5,000 |
| 利息 | 3 | |
| 繰越金 | 202,902 | -29,149 |
| 収入合計 | 1,318,905 | 1,615,851 |

| 支出の部 | | 予算 |
|---|---|---|
| 大会運営費 | 129,133 | 180,000 |
| 年会費等振込手数料・引出手数料 他 | 3,060 | 5,000 |
| 理事会・運営委員会活動費 | 0 | 3,000 |
| 会議代（湯茶代など） | 0 | 0 |
| その他（会場代・文具代など） | 0 | 3,000 |
| 研究・談話委員会活動費 | 0 | 28,000 |
| 研究会・談話会開催費（講師謝金など） | 0 | 20,000 |
| 郵送費（談話会案内はがきなど） | 0 | 3,000 |
| その他（会場代・文具代など） | 0 | 5,000 |
| 若手委員会活動費 | 0 | 5,000 |
| 交通費 | 0 | 5,000 |
| その他（会場代など） | 0 | 0 |
| 広報委員会活動費 | 0 | 0 |
| チラシ発注費 | 0 | 0 |
| その他 | 0 | 0 |
| 事務局活動費 | 219,636 | 245,000 |
| 事務用品・消耗品費 | 0 | 5,000 |
| 郵送費・配送代 | 39,636 | 12,000 |
| 印刷費（NL・大会予稿集など） | 0 | 10,000 |
| その他（封筒印刷・振替伝票印刷・コピー・FAX等） | 0 | 3,000 |
| 交通費 | 0 | 10,000 |
| 事務局幹事報酬 | 180,000 | 180,000 |
| 会員発送作業アルバイト代 | 0 | 20,000 |
| その他（会議室代など） | 0 | 5,000 |

| | | |
|---|---|---|
| 編集委員会活動費 | 158,251 | 191,000 |
| オンラインジャーナル維持管理費 | 7,731 | 8,000 |
| 郵送費・コピー代 | 10,520 | 3,000 |
| 編集幹事報酬 | 120,000 | 120,000 |
| J-STAGE登録・更新手続き等アルバイト代 | 20,000 | 60,000 |
| 学会誌支払（出版費用、送料） | 592,146 | 560,000 |
| ZOOM有料ライセンス | 21,376 | 24,000 |
| 会員管理システム維持費 | 144,452 | 150,000 |
| 若手奨励賞副賞費 | 30,000 | 30,000 |
| 学術誌積立金 | 50,000 | 50,000 |
| 予備費 | 0 | 144,851 |
| 支出合計 | 1,348,054 | 1,615,851 |

**4.** <u>学会資産資料</u>

| 2022年度末 学会資産 | | |
|---|---|---|
| | 銀行（所在地） | 金　額 |
| 預貯金等 | 郵ちょ振替口座<br>（世田谷上馬支店） | 1,550,665 |
| | 郵ちょ総合口座<br>（世田谷上馬支店） | 320,792 |
| | 払出現金 | 20,179 |
| | 小計 | 1,891,636 |

| | | |
|---|---|---|
| 流動資産 | 合計 | 1,380,596 |
| 積立金 | ②学会基金 | 211,040 |
| | ③学術誌積立金 | 300,000 |
| | 小計 | 511,040 |
| 学会資産 | 計 | 1,891,636 |

# <u>VI. 事務局からのお知らせ</u>

1) **Newsletter** のメール配信について： **Newsletter** は、**41** 号から郵送事務と経費削減のために、電子メール登録のある会員の皆さまには、電子メールによる配信をさせていただくこととなりました。
**Newsletter** の発行にあわせて、学会ホームページ（**HP**）に、**Newsletter** が配信された旨告知し、会員の皆さまに電子メールでの着信をご確認いただくことといたしました。お使いのメールによって、迷惑メール等へ振り分けされるケースがありますので、見落としされませんようご注意ください。学会からのメール配信で不着信につきましては、学会事務局までご一報ください。

2) 会費納入状況などの確認は、学会の **HP** の「会員限定」のところにある、「会員用マイページ」へのアクセスで、各個人限定の閲覧にてご確認ください。
会員限定のマイページにアクセスする際は、年誌とともにお送りしている請求書に記載されている **ID** と パスワードをご利用ください。基本的に事務局にて慎重に管理していますので、メルアドや連絡先

の変更などは、事務局にご一報ください。

3）会員の皆さまへの会費納入の案内は、書籍版・機関誌の発送時にて、「宛名ラベル」での会費告知と振替用紙の同封の送付の際にて、行わせて頂くこととなりました。ご理解、ご協力のほど宜しくお願い申し上げます。

4）学会誌・書籍（普及ブックレット）版のご活用について、学会活動の貴重な成果が掲載されておりますので、ゼミ演習等でのテキスト利用など、ぜひご活用と、ご協力頂きますようお願い申し上げます。

5）年度内の今後の運営委員会・理事会の日程（現時点での予定）は以下の通りです。

第2 回 2023 年10 月14 日（土） 13:15～15:45 運営委員会（理事参加歓迎）
第3 回 2023 年12 月16 日（土） 13:15～15:45 運営委員会（理事参加歓迎）
第4 回 2024 年2 月10 日（土） 13:15～15:45 理事会・運営委員会
第5 回 2024 年4 月27 日（土） 13:15～15:45 運営委員会（理事参加歓迎）
第6 回 2024 年5 月25 日 理事会・運営委員会

2020 年度からオンライン会議による開催を踏まえて、従来の運営委員会を理事の自由参加として運営委員会・理事会として行ってきました（2021・21 年度）。2023 年度も基本的には同様なのですが、会議名を明示しました。 運営委員会（理事の参加歓迎）ということで、会議開催は理事メール宛として理事の積極的参加を期待してご案内いたしします。

6）第2 回研究談話会のお知らせ

下記の通り、第二回研究談話委員会主催の会合をオンラインで開催します。
日時：10 月1 日（日）午後1 時～3 時
媒体：オンライン（参加希望者に後日、Zoom URL をご連絡します。）
講師：倉本 宣（明治大学農学部教授）
タイトル：「市民参画型の里山管理における目標とする自然についての合意形成」
概要： 「私は、生きものについての研究を基盤に、人と自然との関係を考えてきました。里山については、東京都の職員だったときの都立桜ヶ丘公園の雑木林ボランティア、川崎市内の大学の教員となってからの生田緑地マネジメント会議および自然会議、活動の助言をさせてもらってきた横浜自然観察の森など、公有地を活動の場とした市民の活動をもとに、多数の市民が行政と協働して里山を保全・再生する際の合意形成の重要性とむずかしさについてお話しします。
里山という用語は1990 年初めに定着し、市民による里山保全・再生活動の歴史は30 年間を越えたところです。今回は、活動の中から、目標や手法の合意形成を中心に考えてみます。」

＊非会員の方もご参加できますので、ご関心のありそうなお知り合いの方にもお伝えください。
＊参加ご希望の方は、23kenkyudanwa.sogoningen@gmail.com まで下記を記して、メールをお送りください。

氏名： 所属： 会員・非会員の区別 連絡先メールアドレス：

主催：研究談話委員会

# 学会誌販売のご案内

総合人間学会誌『総合人間学』の以下ラインナップを、学会の在庫分にかぎり

1 冊　**特価１０００円**（送料別）にて販売いたします！

購入ご希望の方は、注文冊数、送付先を学会事務局までメールまたは fax にてお送りください。

第 13 号　『科学技術時代に総合知を考える――文系学問不要論に抗して』
第 12 号　『〈農〉の総合人間学』
第 11 号　『人間にとって学び・教育とは何か――未曾有の教育危機に直面して』
第 10 号　『コミュニティと共生――もうひとつのグローバル化を拓く』
第 9 号　『〈居場所〉の喪失、これからの〈居場所〉――成長・競争社会とその先へ』
第 8 号　『人間関係の新しい紡ぎ方――3・11 を受け止めて』
第 7 号　『3・11 を総合人間学から考える』

【本件連絡先：学会事務局】
・E メールアドレス contact@synthetic-anthropology.org

（事務連絡）　　≪ 学会費の納入お願い ≫

＊総合人間学会・年会費、昨年度（2022 年度）の振り込みがまだの方は、今年度と合わせてお振り込み下さい。学会誌（書籍版）送付時に振り込み用紙を同封、見当たらない方は郵便局の振込用紙にてお願いします。（過去年度未納・滞納の会員の方は、早急にご対応のほど宜しくお願い申し上げます）

● 会計年度としては、4 月からは 2023 年度となりますので、2023 年度の学会費につきまして、早めの納入をお願いいたします。6 月研究大会前に、学会誌『総合人間学 17』の刊行・送付をしていますので、同封の振込用紙をご利用ください。

学会費：一般：7,000 円　・減額：4,000 円（減額は申請者のみ：学生や非常勤職などへの配慮）
　・加入者名：　総合人間学会　　口座記号番号：　00180-2-579072
① 郵便局そなえつけの振替用紙、② ATM 送金、③ 電子振込み、に対応しています。

◆ひろく学会員の門戸を開いておりますので、ご関心の方々にぜひ入会をお勧めください。
　学会 HP（入会案内）参照：　http://synthetic-anthropology.org/?page_id=57